著者について

明治三十一年（一八九八年）十一月五日、高知市に生まれる。父徳治は医者。少年時代画作を好む。両親の意志に従い医者になる目的で岡山六高に入学したが、ゲーテの『タウリス島のイフィゲーニェ』の感動から、東大独文科に入学。その頃から、詩と評論を書き、またロマン・ロランを読むためにフランス語を学ぶ。幼時から南国の光の中でめざめた造形世界への関心に、北方ヨーロッパ的及びインド的な内面性と音楽性とが精神的課題となり、東西両洋の文化綜合の新しい形をはぐくみ、ノヴァーリス、リルケ、ヘッセの世界に入る。大正十三年に東大を出て法政大学予科のドイツ語教授となる。昭和四年の春フランスに行き、スイスにロマン・ロランを訪問、その後パリのデュアメル、ヴィルドラック、マルチネら「アベイの詩人たち」から感化を受け、フランスの詩的・哲学的な精神伝統の生命に触れる。昭和六年日本に帰り、法政大学、一高でドイツ語、ドイツ文学を講ずるかたわら、ロマン・ロランやアランの著作を訳し、独仏両文化の対比、綜合を自己の魂の問題とした。『ロマン・ロラン』は戦時中に書かれ、戦後に充足された。評論集『心の遍歴』『詩と友情』『詩心の風光』『精神の風土』などの中には、精神の一如（ユニテ）の信仰と、個性的人格の中心へ向かう道での照応の美論とが述べられた。戦後に一年間、東大で「ドイツ文学とフランス文学の交流」を講じた後もっぱら著作生活に入り、ロマン・ロラン『ジャン・クリストフ』をはじめ数多の翻訳、詩作・評論・美術評論に専念、また画作にしたしむ。昭和三十三年スイスの国際的文化思想誌『ランコントル』Rencontre Orient Occident の編集委員日本代表に委嘱される。